

一 般 演 題

1. サイログロブリンキットおよびチログロブリン・

I-125・キットによる血清サイログロブリン値測定

大塚 誠 一矢 有一 桑原 康雄

和田 誠 塩崎 宏 松浦 啓一

(九大・放)

小宮 妙子 (同・放部)

栄研サイログロブリンキットおよび CIS 製チログロブリン・I-125・キットの基礎的検討ならびに臨床的検討を行った。

両キットとも再現性、回収試験、希釈試験のいずれもやや悪く、今後とも改良が必要と思われた。各種甲状腺疾患における血清サイログロブリン値には疾患特異性はみられなかった。血清サイログロブリン値は転移のある癌では異常高値を示すものが多く、癌の follow up に有用と思われた。

2. 腫瘍マーカーとしての血清ボンベシン値の測定の意義

塩崎 宏 一矢 有一 桑原 康雄

和田 誠 大塚 誠 奥島 一洋

古川 達也 松浦 啓一 (九大・放)

曾根 久雄 (ライバビッグアッセイ研)

肺癌特に小細胞癌で上昇するといわれている血清ボンベシン値を Immuno Nuclear Corporation 社製 Radioimmunoassay Kit を用いて測定した。対象は肺癌 44 例(小細胞癌 7 例)を含む 123 例である。その結果、一部の肺癌、肝癌、膵臓癌等で異常高値を示したが、腫瘍マーカーとしての臨床的意義は少ないと思われた。またあわせて同症例につき測定したフェリチン、CEA、 β_2 -microglobulin 値との比較検討も行った。

3. 血清等半量使用による RIA

吉井 弘文 土亀 直俊 富口 静二

馬場 祐之 高橋 睦正 (熊本・放)

T_3O , TSH, CEA, AFP, Insulin について規定量の 1/2, T_3 , T_4 については 2/5 量の血清、標識物質、抗体などを使用して RIA を行った。

Insulin を除く全ての RIA において、Total count に対する Bo Count の結合率、標準曲線および検体にほとんど差を認めず、半量使用による完全な RIA が可能と思われた。

Insulin では、標準曲線はほぼ同じ傾向を示したが、Bo の結合率は大幅に低下し、検体測定で、正常域および高濃度血清で、およそ 2 倍程度の高値を示し、半量測定は成立しなかった。

4. [Tyr¹]-Secretin を標識抗原としたセクレチンの radioimmunoassay (RIA)

大浪 俊平 中野秀一郎 有門 芳子

黒田 環 仲山 親 中田 肇

(産業医大・放)

膳所富士男 (同・一外)

合成セクレチンのアナログである [Tyr¹]-Secretin をクロラミン T 法により Na¹²⁵I で標識し、Bio-Gel-P4 カラムを用いたゲル濾過により精製標識抗原を得た。抗血清は Calbiochem 社抗セクレチンウサギ血清を、標準物質には合成セクレチンを用いてセクレチンの RIA 系を確立した。Assay は diluent に 1% BSA と Trasylol 250 KIU/ml を含む 0.1 M P.B.S を使用し、標準物質と抗血清を加え 2 日間の preincubation 後、¹²⁵I-[Tyr¹]-Secretin を加え、さらに 24 時間後に二抗体法で bound と free の分離を行った。この測定系における最少検出感度は 50 pg/ml で、C-peptide, motilin, VIP, Glucagon, CCK-8 とは 100 mg まで、IRI とは、320 μ V まで交叉反応性を示さなかった。